

【折々の季語 124 三日】

ひとりりて家あたたまる三日かな

田中裕明 (『先生から手紙』)

年の瀬やお正月というのは、刻一刻と過ぎてゆく時間を意識させる。それとともに、人に、家というものを意識させる時期なのかもしれない。人が帰ってくると灯がつき暖房がつくから暖かくなる、という理屈のみならず、人が帰ってきたことを家が喜んでいるようにも思えてくる。

母が家のなかに我あり羽子日和 (『先生から手紙』)

という句もある。実家に帰省したことを詠んだのかもしれないが、幼い日を回想しているのかもしれない。羽子板という季語での題詠の句とも思える。